



湯まつり『源泉お湯かけ合戦』(2月4日)



郷土資料館体験学習『和菓子づくり体験』(3月3日)

未来のノーベル賞候補者たち

登別に住んでいながら地元のことをあまり知らないで、ガイド見習いとして小学3年生の郷土学習・野外研修会に同行させていだいた。

秋も終わりに近づき少し肌寒い日だったが、子どもたちは弁当を背に声を弾ませて温泉地を歩いていた。

ガイドさんが一生懸命話をしている時に『奥の湯』から流れ出た湯の中にポイと石を投げて遊んでいた子がいたが、その子が「あれ、石が溶けてしまった」と叫んだ。

すると数人の子が勝手に集団から離れてきて、同じように石を湯の中に投げ入れて「ほんとだ、このお湯はすごく熱いんだな」と、かなりの高温を推測する。次に「オマエも手を入れてみれ」と火傷を覚悟しておっかなびっくり湯を指で触ってみる。そして「なんだ、そんなにあつくはないわ」と不思議そうに顔を見合わせた。それから投げた石を掴み出し「なんにも溶けてないな、泥が流れたんだ」「色が似てるからまちがえたんだな」と、この状況に納得してうなずいていた。

だが、彼らは観察・実験を大切に
する未来のノーベル賞候補かも知
れない。湯気に覆われた大湯沼か
ら立ち去ろうとしている旅のオジ
サンに、わざと聞こえるような声
で、「上から見ると、沼のまん中が
輪になっていて、あそこだけゆげ
が出てないんだよなあ」と自然の
神秘を話しているかわいい広報員
もいた。

散策路では、数多い落ち葉の中
に半分だけ色が変わっている葉を
見つけて喜んだり、大岩を見上げ
て、「ゴリラがいばってるみたい
だ」と想像力を働かせるロマンテ
イストがいて集団がスムーズに動
かなこともあった。

時間が限られた学習で先生方は
大変だなあと思ったが、好奇心あ
ふれる子どもたちと出会えて楽
しかった。

(美園町/西巻弘光さん・66歳)

『ふおれすと鉱山』・ 何度も足を運びたくなる 施設と環境を目指して

登別市ネイチャーセンター『ふ
おれすと鉱山』として新しくなっ
たのが昨年の4月で、専門家スタ
ッフを3人配置してのスタートで
した。ふおれすと鉱山はオープン
以来老若男女、たくさんの方の市
民の方が来館しています。

支援ボランティア組織『モモン
ガくらぶ』は市民懇話会のメンバ
ーが中心となり、昨年9月正式発
足。現在の会員数は52人で、下は
小学生から上は大正生まれとかな
り幅広い年齢層となっています。
モモンガくらぶはネイチャーセ
ンターに対する人的支援はもちろ
ん、独自の事業などを展開してい
くことを主な目的に活動をしてい
ます。

今年もふおれすと鉱山に足
を運びたくなる施設や環境になれ
ばいいなあと思います。

ふおれすと鉱山とその周辺はリ
ラックスするにはとてもいい素材
がそろっています。その素材を生
かすも殺すもここに来た人次第で
す。
(新生町/松原條一さん・ももん
がクラブ会長)



ネイチャーセンター『ふおれすと
鉱山』